

■ 編集 NOTE

『生命誌ジャーナル2005年夏号』の年間テーマ「観る」の刊中に「観察による手描きと再認を求める写真」という主題で湛千尋氏（写真家／多摩美術大学教授）と中村桂子氏（JT生命誌研究館館長）による「生命科学の世界に於ける「観察」の過程で用いられる、「写真」と「手描き・デッサン」という対極の手法」についての対談が掲載されている。ここで論じられている「科学的態度」はそのまま「建築の世界に当て嵌められる」ものと感じ、以下に参照してみた。

—— 科学の世界では対象を理解・把握するために現象を「観る＝観察」することが重要で、この観察には目と手の働きが重要であった。例えばレオナルド・ダ・ヴィンチによるデッサンやリンネ（スウェーデンの博物学者／動植物の図像で有名）のスケッチなどがその代表といえる。近代でもモン・イ・カハールというニュエーロンの構造を特定してノーベル生理学・医学賞を受賞したスペインの科学者が「見て描かなければ、ものは理解できない」と、研究室の学生にもデッサンすることの重要性を説いていた。しかし現代は写真の活用により人間の目と手が分離してしまった。目で見れば何でも手描きで描けなくなった。ものを深く理解するには、対象と向き合い観察し、理解して手の動きに伝え手技で像を描く。対象を見直し線を引き直す。こうした観察の回路は非常に構造的であり相応の時間のかかる行為（デッサン・スケッチ）となる。片方近代の科学の観察に於ける写真の導入は「ある一瞬の判断に全ての時間を凝縮する」これは相応の時間をかけて「構築」していく「デッサン」とは全く逆の過程をたどるものといえる。デッサンとは見るという行為を通して自分が見ている状態を「生き直す過程」であるといえる。ある一定の時間、自分がいろいろ考えながら対象に向き合い、生きて、呼吸する。

■ 執筆者 PROFILE

松家 亮（まつい まする）

1947年生まれ／1972年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業／1972～88年椎名政夫建築設計事務所／1988年ARK建築研究所を創設。黒木、新井、国義と共に創設／現在武蔵野美術大学理事、武蔵野美術大学評議員、「デジタル誌」（彰国社）編集委員

藤原 成典（ふじわら なるき）

1953年生まれ／武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業後、鬼頭祥建築設計事務所などを経て、1990年藤原成典設計室設立。著書に「歩く・見る・描く・デザインする—スケッチで脳を鍛えよう—」彰国社。

その「時間を生き直す」のがデッサンであり、今の科学者にも改めて描くことの意味を熟考して欲しい。——

私たちはとかく海外や地方に行き、出会った「建築」や「街並み」に對峙する方法として「目と心で見る（記憶する）」のではなく「写真により記録すること」に依存しがちである。生命科学の世界に於ける「観察」への「手描き／スケッチ」と「写真」という対極の「記録・記述」の過程の記事をあえて取り上げたのも「近年、建築の世界でも「スケッチ」することの意義が忘れられてきつつある」ことへの危機・警鐘の意味合いがあった。建築の世界でも多くの巨匠達（プロピウス、ミース、コルビュジェ、ライト、現代ではフォスター、ピアノ、安藤等々）が「数多くのスケッチ・デッサン」を残している。

「建築や体験を「手描きスケッチ」で描き続ける魅力」については号号「うごき」に特集した「藤原成典氏のコルビュジェハウス」の作品が写真記録との対極の姿を示してくれている。そこには「その手わざと観察者の深い洞察力」が見るものに対象の魅力のエッセンスを伝えてくれる。

私自身はこれまでの経験として「カメラのレンズ越しに対象を見る」ことが多かったように思える。海外等で記録した写真は1万点を超える。しかし「藤原氏のスケッチ帳」にある「対象への深い観察と理解」を通して「建築と対峙し、一瞬をその対象と共に共有する時間」を表現する「成果」を見ると、「私は写真を描くことに多くの時間を割きすぎ、対象の建築と深く交感する貴重な時間を失ってきたのではないかと改めて考えさせられた。

今号「藤原氏／うごき」特集が会員の皆様にも「建築・空間や都市・街並みとの出会いを「記憶する方法」について改めて考える機会」として頂けたら幸いである。

斉藤 博

建築 東京 02

第50巻／第2号

通巻592号

2014年2月10日発行

定価／750円

発行人：高橋 孝一郎

発行所：一般社団法人 東京建築士会

〒104-6204

東京都中央区晴海1-8-12

オフィスタワーZ 4F

[TEL] 03-3536-7711

[FAX] 03-3536-7712

[E-mail] info@tokyokenchikushikai.or.jp

制作：(株)ケンオン

〒107-0062

東京都港区南青山6-11-1

スリーエフ南青山ビル7F

情報委員長：斉藤 博

委員：岡本 博

観音 克平

小林 剛士

朝見 宗徳

柴田 一廣

千葉 修明

三原 育

編集：川村 哲也

梅津 洋佑

<http://www.tokyokenchikushikai.or.jp/index.htm>

コルビュジェの 終の住処カップマルタンの休暇小屋を訪れて —私のスケッチノートから—

建築家・ものづくり大学教授 藤原 成典

カップマルタンへ

2011年2月23日、ものづくり大学カップマルタン休暇小屋実測調査隊は一路フランスへ向け成田空港を出発した（fig.1）。主たる目的は、コルビュジェの終の住処と云われるキャバノンのレプリカを学内に制作するにあたり、先ずはホンモノを肌で感じること、そして少しでもコルビュジェに近づいて休暇小屋（fig.2）の実測をすることである。これは、本学の「世界に学ぶものづくり」というプロジェクトの一環として、学生自らが制作する学生主体の「ものづくり」が原点にある。折角つくるのだから単なる大きさだけの再現ではなく、家具は勿論のこと、土番、取手（fig.3）、壁面に至るまでつくり込もうと建設、製造両学科協力の下、教員6人、学生10人、総勢16人の道行きとなった。本稿でその約1週間の旅（fig.4,5）のなかのカップマルタンの休暇小屋の実測で得た考察を私の拙いスケッチノート（fig.6）^{※1}を辿りながらご紹介したいと思う。

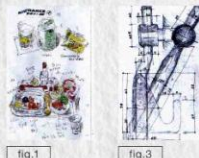


fig.1

成田からパリ、ドゴール空港経由でニースまでの機内食。飛行時間13時間30分。



fig.3

建具の取手をスケッチ。アイアンの手づくり感、持ちやすい様に握り部分が手前に。



fig.2

休暇小屋のアプローチ。コルシカの松が育ち東面の窓だけが見える。玄関脇にアロエ。



fig.4

延べ8日間の行程。コルビュジェ財団にも立寄り、マルセイユのユニテに宿泊。



fig.5

パリから南仏へ、コートダジュールの緯度は札幌とはほぼ同じだが暖流の影響で暖かい。



fig.6

スケッチノートの表紙。使い慣れたB6サイズは、無地のスタンダードサイズ。

※1 調査にあたってフィールドノートは欠かせないものだが、ここでいう私のスケッチノートは、スケッチを主体とした備忘録のことでB6版紙使いの無地のノートを指す。「身の丈程にスケッチを重ねる」という先人のアドバイスに従って、このノートづくりを始めて既に30余年になる。先ずノートにページを打ち、目次を作るところから始まる。その時々に応じてパンフレットやスタンプ、半巻などを詰め込んだ「何でもノート」である。

2つの問い

カップマルタン駅（fig.7）を降りたち小屋まで歩く。一昨年還暦を迎えたこの小屋（1952年竣工）を訪れて驚いた。安手な波板スレート屋根と、パネルに端材を張り付けてあるだけの大変粗末な外壁でできている。丸太小屋と思っていた休暇小屋は実はそうではなかった。出隅の納まりも太鼓落としの弓形断面がそのまま見えるぶっきらぼうなディテールである。（fig.10～15）。何故これ程に粗末で廉価な材料ばかりなのだろうか。

また、何故こんなに小さくて閉鎖的なのか？ 僅か10畳程度の小屋に5つの小さな窓。特に海を望む南面の窓は700×700と180×1,300の2カ所のみである。地中海一望の下に見渡せる絶好のロケーション（fig.8）にも拘わらず、何故こんなに小さな窓しかないのか？ 近代建築の5原則にある横長

窓はオーシャンビュー（fig.9）にこそ相応しいはずだ。沸々と疑問が湧いてくる。しかし、これらの疑問は現地を歩くうちに次のような思いに至る。



fig.7

ロブリュス・カップマルタン駅。列車でニースから約30分まで到着。



fig.8

カップマルタン周辺地図。起伏に富んだ温暖な地。空にはカイトが舞う。



fig.9
カッパマルタンの休暇小屋。小屋の前から地中海を臨む。風光明媚な景色が広がる。

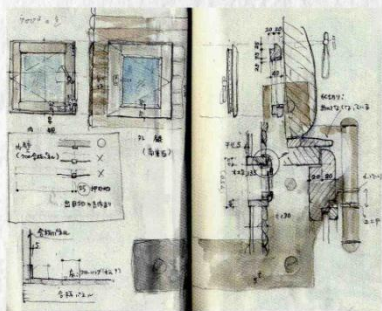


fig.11
休暇小屋実測／建具。室上部に木製水切があったようだ。硝子は750角の窓のみ。

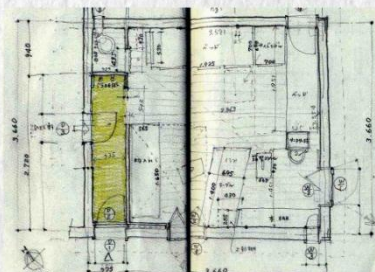


fig.10
休暇小屋実測／平面図。廊下部分2畳、部屋部分8畳程度。究極の最小限空間。

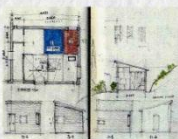


fig.12
休暇小屋実測／立面図・断面図。天井伏倒。折上天井が効いている。

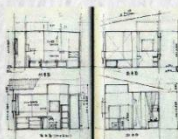


fig.13
休暇小屋実測／展開図。モデュロールの2,260が天井高。

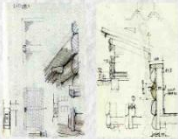


fig.14
休暇小屋実測／外観詳細図。木製パネルに太鼓張りの扉材でつくられた外壁。



fig.15
休暇小屋実測／建具表。開口部は出入り口と小さい窓を並べた方角。

素のコルビュジェを支える環境

恐らく、彼にとって外観よりも内部空間の方がより重要だったに違いない。室の壁たるはその空にあり。つまり、建築はモノという材料で構成されるが、大事なものはそのモノより実体のない空間の方である。実際、海岸から小屋は樹木に埋もれてほとんど見えない。インテリアはそれを形成する機能を満たすだけの材料でありさえすればそれで事足りる、より注意すべきは材料より空気のかたち、空間にあったのである。人体から黄金比で割り出した寸法体系、モデュロールも最小限空間こそ意味がある。

次に、「日光好み」のコルビュジェが敢えて開口部を絞り、最小限空間を追求した理由は、自然に対して遠慮して棲むことと室内空間を意識したからではないか。「彼は夏休み、他人にまったく知らせなかったこの小屋で、地主の居酒屋の親爺アンドレーを相手に、気楽に自然を楽しんでいた。不慮の死を遂げたこの海から彼の遺体を引き揚げたのは「おやじさん」と呼んで、それが有名な建築家コルビュジェとはついに知らなかった「近所の人たち」だったという。^{※2} このエピソードからも如何にコルビュジェが素の自分と向き合っていたかが窺える (fig.16)。

一方、小さい空間は、それだけでは完結せず広い空間と対である。その広い空間とは、眼前の地中海とロクブリュヌ村が

相当するだろう。海と山(村)の存在が小屋を成立させている。今回、コルビュジェとイヴォンヌ夫妻の墓碑 (fig.17) を訪ねる途中、ロクブリュヌ村を通りその存在を知ることになるのだが、私はその中世のヴァナキユラーな建築群の中を夢中でスケッチして歩いた (fig.18~25)。

前川國男は、「彼(コルビュジェ)を簡単に機能主義者と片づけるのはとてもない見当違いである」^{※2} と言っている。

また、1923年 CIAM の第2回国際大会の議長だったコルビュジェの選んだテーマは「最小限住宅」だったのも興味深い。眼下に広がる地中海、背後のロクブリュヌ村が最小限住宅を可能にする。環境と建築、小屋だけを単独で語ることは出来ない。



fig.16
海岸で抱った石に座る。彼は「建築家になる前にすぐれた生活学者になら」^{※2} という。



fig.17
コルビュジェ夫妻の墓碑。近くに墓イヴォンヌの散骨がある。

※2「宿命に耐えた男<コルビュジェ>」前川國男



fig.18
ロクブリュヌ村への導入路。海だけでなく山(中世の村)の存在があった。



fig.19
ロクブリュヌ村／いくつものトンネルを抜ける。起伏があり変化のある迷路空間。



fig.20
ロクブリュヌ村／住宅の玄関。住戸毎に様々な表情、個性を持つ。



fig.21
ロクブリュヌ村／石畳の続く路地裏に所々に空が抜けるゴタツと緑が点在する。



fig.22
ロクブリュヌ村／様々なトンネル様々な景観。村全体が要塞から構成されていた。



fig.23
ロクブリュヌ村／村をより詰めると周囲の緑が迫っているのがわかる。



fig.24
ロクブリュヌ村／アースカラーは景観に優しい。石と土と木でできている。



fig.25
ロクブリュヌ村／コンタに馴染んだスロープ。一つとして直線がない。

見学のご案内

建築は環境と一体でありカッパマルタンの小屋もその例外ではない。従って、現地を訪ねるのがベストであるのは勿論である。

私たち調査団が現地調査をするにあたり、室内を見学できたのは僅か4人一組20分で4班の計80分だった。実測するのもあわただしく、コンベックスは建物に触れてはならないと厳しい扱いで、空間を味わうといった心の余裕はなかった。調査から約1年8ヶ月後の昨年11月ようやく完成した (fig.26)。立地条件は全く違うが、結構いいところもある。触ってみる、座ってみる、測ってみる、閉めてみる (fig.27)。



fig.26
キャンパス内に完成した休暇小屋。金物まで再現している。



fig.27
窓を全て閉じた室内。微かに窓から薄明かりが漏れる。



fig.28
南面する縦スリットの窓だけを開放する。これだけでも充分明るく感じる。



fig.29
照明だけを点灯。傘が回転するので光の量や向きが変える。

開けてみる (fig.28)、点灯して見る (fig.29)、など自由な体験が可能なことだ。

【お問い合わせ】
ものづくり大学では、随時見学が出来ます。ご希望の方は下記にお問い合わせ下さい。なお、制作過程は建設学科YouTubeチャンネルにて公開中です。

〒361-0038 埼玉県行田市前谷333
ものづくり大学 技能工芸学部 建設学科事務室
TEL: 048-564-3849